

国指定史跡 鳥海柵跡
保存管理計画書

序 文

奥羽山脈の秀峰駒ヶ岳の麓に拓けた金ヶ崎町は、東端を北上川が、南端を胆沢川が流れる水と緑の豊かなところです。この地には、後期旧石器時代から近代までの先人の歴史、文化及び生活を今に伝えてくれる多くの遺跡が残されています。これらの遺跡はかけがえのない文化遺産として金ヶ崎町の歴史を伝えてくれるだけでなく、未来を展望する礎となるものであり、私たちが保護し更に活用に努めて次の世代に伝えていかなければなりません。

国指定史跡鳥海柵跡は、地域住民によって安倍宗任の籠（城）や鳥海館と伝承されてきた文化遺産です。約千年前、岩手県内陸部にあたる陸奥国奥六郡を治めていた安倍氏は、前九年合戦で陸奥守兼鎮守府将軍源頼義や出羽国の豪族の清原氏に滅ぼされました。しかし、安倍氏の歴史や文化は、平泉の仏教文化を開花させた奥州藤原氏へと継承されることとなります。その後も安倍氏の功績は、東北の人々によって後世へ語り継がれ、城柵や神社等のゆかりの地や数多くの伝承が大切に残されてきました。

本遺跡は、昭和33年度の旧金ヶ崎中学校建設時に始まり、東北縦貫自動車道、金ヶ崎バイパスの整備にともない発掘調査が行われてきました。発掘調査の結果、地域住民による伝承や『陸奥話記』等の文献の記述から想定される建物跡などの遺構や数多くの土器が確認されたことで、本遺跡が鳥海柵であると示唆されるようになりました。平成21年（2009）、本遺跡内の縦街道南区域から大型の建物跡が検出され、鳥海柵遺跡調査指導委員会の承認を受け、金ヶ崎町教育委員会として本遺跡が鳥海柵であるとの特定にいたりました。これらの経過を踏まえて、平成25年1月28日付けで金ヶ崎町教育委員会から文部科学大臣へ「史跡指定意見具申書」を提出し、同年10月17日付けで国史跡として官報告示されました。

本計画書では、国指定史跡鳥海柵跡を確実に保存し、次世代へと継承し活用を図ることを目的として策定しました。鳥海柵跡を取り巻く自然環境や歴史、現状等を踏まえ、保存管理していくための基本方針や方法、現状変更等の取扱基準、活用と整備の基本的な考え方や保存管理の体制を示し、町民とともに取り組む保存及び活用の指針としてまいりたいと考えます。

最後になりましたが、本計画書刊行にご指導ご協力を賜りました関係各位、地元の皆様に心から感謝申し上げます。

平成27年10月

金ヶ崎町教育委員会

教育長 新田 章

例 言

1. 本書は、岩手県胆沢郡金ケ崎町西根二ノ宮後・鳥海・原添下・縦街道南に所在する国指定史跡鳥海柵跡の保存管理計画を金ケ崎町教育委員会がまとめたものである。
2. 本計画の策定は、平成 26、27 年度の 2 カ年で、国庫補助事業として実施した。
3. 本計画は、史跡指定範囲内（117, 198. 58 m²）を対象とし、一部追加指定の可能性も含め、指定範囲外にも触れている。
4. 本計画の策定に際し、文化庁文化財部記念物課史跡部門主任文化財調査官 佐藤正知氏、岩手県教育委員会事務局生涯学習文化課の助言、指導を得た。

5. 本計画の策定にあたり、史跡鳥海柵跡保存管理計画策定委員会の指導、助言を得た。（敬称略）

委員長	本 堂 寿 一	（前鳥海柵遺跡調査指導委員会委員長 元北上市立博物館館長）
副委員長	西 久 雄	（南方地区自治会連合会会長）
委員	大 平 聡	（宮城学院女子大学教授）
委員	佐 川 正 敏	（東北学院大学教授）
委員	高 橋 信 雄	（花巻市博物館館長）
委員	高 橋 学	（秋田県埋蔵文化財センター主任文化財専門員兼班長）
委員	千 田 廣	（横道下自治会会長）
委員	小野寺 惠喜	（地権者代表）
委員	小野寺 嘉人	（町内在住者 （公募））
委員	平 谷 美 樹	（町内在住者 作家（公募））
委員	八重樫 純	（町内在住者 写真家（公募））
助言者	坂 井 秀 弥	（奈良大学教授）

6. 本計画の執筆及び編集は史跡鳥海柵跡保存管理計画策定委員会での検討、指導、助言を得たうえで金ケ崎町教育委員会（中央生涯教育センター文化係）が行った。事務局は以下のとおりである。

金ケ崎町教育委員会	教 育 長	新 田 章
金ケ崎町中央生涯教育センター	所 長	伊 藤 明 穂
	所長補佐	佐 藤 政 義
	副主幹兼文化係長	浅 利 英 克
	学芸員	高 橋 麻 依 子
	文化財調査員	及 川 理 佳 子
	文化財調査員	菅 原 真 由 美 （～平成 27 年 3 月 31 日）
	文化財調査員	佐 藤 信 也 （平成 27 年 5 月 1 日～）

7. 本計画の策定にあたり、次の方々、機関よりご指導ご教示を得た。記して感謝申し上げます。（敬称略）

金ケ崎町文化財調査委員 吉田裕生 阿部勝則 窪寺茂 大島晃一 橋本裕之
奥州市教育委員会、秋田県横手市教育委員会、秋田県男鹿市教育委員会
樹木医 菅原勉、八重樫純（表紙写真撮影）

8. 本計画の一部は、株式会社 文化財保存計画協会に委託した。

目 次

序文

例言

目次

第1章 計画の沿革と目的	1 計画策定の沿革	1
	2 計画の目的	1
	3 計画の位置づけ	2
	4 委員会の設置と審議経過	2
第2章 史跡鳥海柵跡の概要	1 指定概要	3
	2 位置と地勢	6
	3 地形環境	6
	4 遺跡の範囲	7
	5 歴史的環境	8
	6 安倍氏の伝承	23
第3章 史跡鳥海柵跡の調査	1 調査の概要	35
	2 出土遺物	40
	3 遺構の分布状況、構造	41
	4 遺跡の変遷	44
	5 文献等の調査	47
	6 鳥海柵跡の歴史的価値	51
第4章 史跡鳥海柵跡の現状	1 土地利用状況	54
	2 土地所有状況	58
	3 植生調査	59
	4 景観調査	60
	5 史跡の構成要素	64
	6 活用の状況	73
	7 関連法規	73
	8 地区区分	74
第5章 保存管理計画	1 基本方針	78
	2 現状変更の方針	78
	3 追加指定の方針と周辺環境の保全	83
第6章 整備活用方針	1 基本方針	86
	2 進め方	86
第7章 運営及び体制整備	1 基本方針	91
	2 運営体制	91
参考文献		92
参考資料 1～5		93
奥付		

